

梁山丁の歩み(中)

李 青

一九七九年 六十六歳

梁山丁は一九七九年六月十四日、収容所から釈放された。まさにこの日は梁山丁にとって、人間として再び生を受けた特別な日だった。二十二年の収容所生活はかれの人生の四分の一の時間をむだにした。収容されたとき、かれは四十代の壮年であったが、出獄した今は、もう頭に白髪がいつぱいの老人になっていた。なんと悲惨なことであろうか。

山丁は再び遼寧省作家協会にもどり、創作室に配属され、『東北現代文学史』審査顧問にも招聘された。月給のランクは一九五四年には十四級にまで達していたが、「文革」で関係書類が紛失していたため、新たに十五級と決められた。

作家協会にもどった当初、かれは独身寮に寄宿した。

そこで、同室の王丹羊(「五・七」幹部学校に下放された美術編集者)、金河(内蒙古からきたばかりの青年作家、後、省作家協会主席になった)と親友になった。

秋、山丁は広さ十七、八平方メートルの部屋を与えられた。一家離散を余儀なくされ、二十二年間の囚人生活を強いられた人間にとっては何とも有り難い「家」だった。

かれは專業作家なので、時間的には比較的自由だった。仕事に着いたばかりのこともあり、雑用が少なく、楽だった。山丁は毎朝、ジョキングをした。昔は塀のなかを走ったのだが、今は家から万泉公園(動物園)まで走った。そこで、太極拳を習った。

時間があれば、山丁は親戚や親友を訪ね、皆に自由をえた喜びを伝えた。瀋陽に前妻の妹、羅平(定年した幹

部) 一家、姪の于国珍(夫妻ともに定年した) 一家がある。古い友人に三、四十年代の作家金湯(田兵)、馬尋(金音)、楊絮(楊憲之)、木風(劉毅)、鉄漢(郁其文)、楊蕭、高栢蒼、李喬、李正中、朱媿などがいる。患難をともにしてきた新しい友人には翻訳家の于雷、副編集長の郭鋒、編集責任者の王梓、作家里楊、韓彤夫妻がいる。

かれはまた長春、北京へ行つて、二十数年ぶりに子供、妹、妻の妹、従弟なども会つてきた。

八月、かれはまず親友の蕭軍のお供をして、呼蘭に蕭紅の生家を訪ねた。十日、長春へ行つて、長男の梁大成一家と妻の弟吳乃恭(元東北師範大学教授・すでに退職)

一家と団欒した。そこから北上し、まず、蔡家溝で半日、甥劉培基(妹梁淑の長男) 一家に会つた。このあと、哈爾濱に行った。ちょうど、蕭軍と二人の娘に居合わせた。

哈爾濱でかれらはまず東北烈士陵園に参拝した。八月十五日は金剣嘯殉国四十周年の記念日である。哈爾濱で盛大な追悼式典が催された。黒竜江作家協会の関沫南が司会をつとめ、蕭軍、山丁がそれぞれ挨拶した。このほかに、吉林の廬湘、黒竜江大学教授の陳隄、藤国棟それに金剣嘯の娘金倫夫妻、遼寧の邵文なども参加した。

このあと、山丁は蕭軍などと松花江に行つたり、伊春

の大森林、嘉爾果の小興安嶺を見たり、モーターボートで黒竜江兩岸の風景を見物した。皆、まるで青年時代に戻つたように、興味津々で、道中多くの詩作を残した。

八月二十七日、一行は鏡泊湖近くの吊水楼を遊覧した。翌日、蕭紅研究家の鉄鋒と知り合つた。

八月三十一日、哈爾濱に戻り、再び関沫南に会つた。女流作家但娣(田琳)とも会い、歓待された。残念ながら、かの女は一九九二年に波乱な人生に幕を閉じた。哈爾濱でまた艾青のヨーロッパ見聞の講演を聞いた。九月三日に瀋陽に戻つた。

瀋陽に戻つてから、遼寧省の作家協会の責任者方氷、馬加などに哈爾濱滞在の出来事、特に蕭軍が黒竜江各地で歓迎された様子を報告した。このあと、遼寧省が山丁に長春へ蕭軍を迎えに行かせた。

蕭軍は『文化報』事件で、批判され、長い間不平等に扱われた。一九七九年に三十二年間の冤罪をようやく晴らした。蕭軍は自分のことを「出土文物」と自嘲した。

九月十一日午後、山丁にともなわれて蕭軍は瀋陽に着した。馬加など文学界の要人は駅まで出迎えた。蕭軍は遼寧大廈に泊まつた。

蕭軍を困んで瀋陽で活発な活動がとりおこなわれた。

省が主催した『蕭軍報告会』に参加したり、遼寧大学で講演をしたり、鞍山で文聯の会員と懇談したりした。最後に、瀋陽友誼宮で「魯迅と青年」という題で講演した。そして九月十七日に帰京した。駅まで省、市の文学聯合会、作家協会、文学研究所の責任者や山丁を含めた同僚たちが見送りに行った。蕭軍は瀋陽を離れる前に、山丁などに掛け軸を送った。山丁に宛てたものには次のようなものだった。

文壇を駆けめぐって五十年

身も心もただ傷が残るだけ

九月十九日、山丁はまた北京に行った。今回の北京行きの目的は三つあった。第一、北京にいる子供たちに行く。第二、旧友に会う。第三、これは山丁が北京に行くもっとも重要な目的であったが、家族、友人と羅麦死去三周年記念祭典を催すことだった。文革の時、子供との間に大きな溝が生じたが、これを機に、和解の打開に努力をしようとした。子供たちはかれを許してくれた。すべてまた二十二年前に戻ったようだった。かれは人に会うたびに「わたしの歳は二十二年減らすべきだ」と言っていた。

北京ではまだ健在だった羅烽、白朗、駱賓基、舒群、

孔羅荪、蕭軍などに会った。蕭軍の家によく招待され、そこでまた多くの友人と出会った。

北京にいる間、かれは「曹雪芹故居」を訪ねた。北京図書館へ出かけ、資料を調べた。十月末に、瀋陽に帰ってきた。

十二月二十三日、遼寧省図書館員の李玉朴、曹蓮芝夫妻の紹介で、遼寧省実験小学校の教師李素秀女史とお見合した。二人は一九八一年にめでたく結婚した。

十二月末に、山丁は長春の長男梁大成の家で名誉回復後の元旦を迎えた。一家団欒のなか話が弾んだ。山丁は二十二年來、はじめて微笑んだ。名誉回復して半年の内に『金剣嘯同志を回想する』、『文学の故郷』を書いて、新聞に寄稿した。

一九八〇年 六十七歳

元旦が過ぎてから、山丁は長春から瀋陽に戻った。

『長春』文学月刊社から、山丁に「東北作家群」を書くよう依頼してきた。これは山丁の回想録の第一部になった。かれは十人の作家を書く計画を立てた。この年に、『万里山花紅―蕭軍東北行を記す』、『夜哨』の輝かしい星―蕭紅』（東北作家群像・その2）を完成し、『長春』

六月号に載せた。『暴風雨のなかの鴉―巴来』（東北作家群像・その3）は『長春』八月号に、『夫婦作家―羅烽、白朗』（東北作家群像・その四）は『長春』十月号に、『抗戦歌手―塞克』（東北作家群像の六）は『長春』四月号に、『金劍嘯烈士略伝』は『東北現代文学資料』第一輯に、『蕭紅回想』は『婦女』第五期にそれぞれ掲載された。名譽回復してから、山丁の精神状態、健康状態はきわめて良かった。原稿の予約はぎっしり詰まり、社会活動も頻繁におこなっていたにもかかわらず、山丁はいつも精力的であった。人々はかれのことを「老いてますますさかんなり」と評した。

三月、山丁は遼寧省文学芸術家第二次代表大会に参加した。会議は七日間続いた。省委員会第一書記任重夷が演説した。省委員会書記李荒、常務委員劉異雲なども出席した。席上、馬加を主席、方氷を副主席に選出した。蕭軍の友人方未艾（方曦）は山丁の隣の李玉朴の家に住んでいたのので、山丁と友人になった。かれは山丁に哈爾濱にいた頃のことを多く話してくれた。その頃、山丁は方未艾に毎日会って、お互いにそれぞれの遭遇を語り合っていた。後、蕭軍、方未艾、山丁、陳隄は「関東四友」になった。このほかに、方未艾は山丁に孔羅荪、羅

烽、白朗のことを教えてくれた。

山丁は独身時代に同室だった金河の作品を読んで、『大車店』を読んで、『遼寧文芸』1980年」という題でさっそく書評を発表し、作品の素晴らしさを讃えた。

山丁はまた『延辺行脚』（『延辺文芸』一九八〇年）を発表し、呼蘭、哈爾濱、牡丹江、鏡泊湖などで見聞したことを紀行文にした。

四月、山丁は末息子の結婚式に参加するために、北京に出向いた。二十数年来、父親としての義務を果たさなかつた後ろめたさを感じて、この機会に少しでも償おうと思つたからだった。

一九四六年、山丁は哈爾濱東北文学協会で羅烽の秘書をしていた。仕事の変動と政治の諸原因で二人は三十年以上も会うことができなかつた。四月二十八日、山丁は北京の遠東飯店で羅烽と感激の再会をした。羅烽は自分が阜新に下放されたことや、当時入院中の白朗が『国際協報』を主宰していた頃のことも話した。

五月三日、山丁は中国青年報招待所で草明と会つた。五十年代二人は瀋陽作家協会の同僚だったのである。塞克と李克異夫人姚錦をも訪ねた。

五月、瀋陽に戻つた。

十月、山丁は長春に行った。長春で旧友の譚莫伽、張辛夷（偽滿洲時代の監督。解放後、長春映画撮影所所長。山丁の『郷愁』を出版したことがある。この本は現在、『新現実主義叢書』に収録されている）に会った。長春にいる間、農安にいる妻の弟呉永三に会いに行った。

山丁は長春から戻って、まもなく、北京に行った。北京で旧友の端木蕻良、蔣錫金、姚周などと会った。

北京にいる間、楊朔の弟楊玉璋に伴われ、楊朔故居を訪ねたり、陶然亭公園の花展覧会を見学したりした。これらの活動は後、『東北作家群像』、『東北作家史話』、『文壇交遊録』を書くとき大いに役に立った。

十一月にかれは北京から瀋陽に戻ってきた。『東北作家群像』を書きながら、多くの友人に会って、自分の書いたものを少しでも充実させようと努めていた。かれはたんへん真面目であり、繊細である。これはかれの日記で証明することができる。

十二月二三日、李喬（東北三十年代作家、翻訳家、一九九〇年死去）に陳華（『大同報』編集者）のことについて紹介してもらった。

山丁は季風夫人の李平、鉄漢（東北作家、『瀋陽日報』編集者）から三十年代の作家、烈士である季風のことを

聞き、自分の創作に貴重な資料を集めた。

一九八一年 六十八歳

元旦の後まもなく、瀋陽市鉄西区文化館館長張軍が訪ねてきた。二十数年も保存していた山丁の短編小説『豊年』を山丁に返却した。何十年もの動乱で、山丁自身も自分の原稿や資料をほとんど紛失してしまった。この四十年前に書いた作品を再び手にして、山丁はまるで宝物をえたように喜んだ。かれはこの本の扉に張館長が本を返却すること、苦勞して本を保存したことを書きつけた。

二月、山丁はまず長春の長男梁大成の家を訪ね、それから、北京の三人の子供に会いに行った。母親の羅麦がこの世にいない分、山丁はすべての愛をかれらに注ぎたいと思った。二月の中旬に、山丁は瀋陽に帰ってきた。

山丁は資料を集めたり、創作メモを整理したり、関係者をインタビューしたり、図書館で資料をコピーしたり、新聞、雑誌の原稿を書いたりして、忙しい毎日を送った。

四月、遼寧省作家協会が作家を組織して、瀋陽市于洪区楊士公社寧官大隊で社会生活を体験した。この村は稲と野菜を栽培している。どの家庭にも食糧の貯蓄と貯金

があった。文革前と異なり、村には煉瓦工場、機械工場、豚、鶏、飼育場、魚の養殖場、紡績工場、果物加工工場、印刷工場、ミシン工場……があった。かなり豊かであった。

山丁は「われわれのすべての農村がこのように豊かになればどんなに良いだろう。この日がきつと来る」と日記に記している。

五月、省作家協会の「金河創作検討会」が四日間行われた。プロの作家はみな発言して、若い作家に大きな期待をかけた。この後、金河は遼寧省作家協会の主席に選ばれて、馬加は名誉主席に選ばれた。

六月、山丁は「蕭紅誕生七十年記念会」に参加するため哈爾濱へ行った。会議の参加者は各地から来ていた。蕭軍および娘の蕭耘もわざわざ北京から来た。このほかに、アメリカの蕭紅研究者の葛浩文（ゴールド・ブラッド）、日本の前行淑子、上海の丁言昭も参加した。鉄鋒などが挨拶した。

会議の翌日、参加者は蕭紅の生家のある呼蘭に行き、かの女が通っていた南関小学校、西岡公園などを見学した。

六月二十二日、山丁は蕭軍、陳隄などの親友と車で齊

齊哈爾革命烈士陵園を参拝した。月末に瀋陽に戻った。

八月、山丁の二人の娘が休みを利用して、子供をつれて、父親に会いに来た。山丁は子供たちと大連、羅麦の二番目の姉の家、旅順へ行った。大連で療養院で『同蒲路』、『南泥湾』を書いた老作家の師田手を見舞った。大連から瀋陽に帰る途中、鞍山へ立寄り旧友の王秋螢と会って、『東北現代文学』について話し合った。

二年間つき合って、梁山丁は李素秀と結婚した。二人は師弟でもあり、兄妹でもあり、伴侶でもある新しい生活始めた。

かれらは互いに尊敬しあい、助け合い、学びあいをしながら、山丁の「質素な食をとり、多く歩き、怒らず、家庭円満」の信条を守って、晩年の生活を送ろうと思つた。

この年に、山丁は『帰来人―舒群』（東北作家群像・その五、『長春』六月号に掲載）と『北征詩人―楊朔』（東北作家群像・その七、『長春』八月号に掲載）を発表した。

九月一日、遼寧省委員会直属の機関で社会主義経済理論読書班第四期が始まった。かれらは六中全会公報、決議、党幹部の発言、マルクスの再生産の理論、陳雲の発言集、社会主義経済問題などを四十五日間勉強した。山

丁は毎回出席して、真剣にメモを取った。かれはいかなる仕事に対しても極めて真面目だった。

十月二十九日、報告会に一日中参加した。この会では作家を労働改造幹部を中心に取材するよう要求した。

十一月十七日まで、山丁は省の文学創作協力会に四日間参加してきた。内容は座談、いかに今後の協力関係を結ぶか、作品の表彰及び会員を拡大することなどだった。山丁は真面目にメモを取った。

十一月中旬、陳隄が瀋陽へ山丁を訪ねてきた。山丁はかれと秋螢のにいる鞍山へ行つて、三人で「文選刊行会」について語り合つた。この後、本溪南甸の方未艾を訪ねた。一連の訪問を終えて、二人はまた瀋陽へ戻った。

十二月、山丁は遼寧省文学学会の忘年会に参加した。この一年のうちに、山丁は多くの会議に参加した。二十二年間の収容所生活ではほとんど勉強することがなかった。このブランクを埋めようと懸命に努力した。

この年に人民出版社より出版した『中国文学家辞典』（現代第二分冊）のなかに梁山丁に関する一項目があった。

一月、『北方文学』第二十四期に、山丁が書いた書評『金河の「大車駅の一日」を読んで』を載せた。山丁は若い作家を一貫して応援している。たとえば、軍人作家の劉兆林の『ああ！ソロン河の銃声』を読んでから、劉兆林にさっそく感想文を寄せ、作品の素晴らしさを讃え、激励の言葉をかけた。現在、劉兆林は遼寧省作家協会の副主席を努め、創作研究部の仕事を担当している。

三月八日、山丁は弟が危篤との電報を受けて、翌日に樺甸行きの汽車で出発した。弟の葬式を済ませてから、三月十三日にそのまま呼蘭に行つて「蕭紅死去四十周年」學術討論会に参加した。四日間の予定を終えてから、大慶油田の招きで、遼寧省作家協会副主席の方氷が臨時に組織した訪問団を引率し、大慶を訪問をした。

山丁は大慶師範専門学校の学生に「東北作家群」、「東北文学と郷土文学について」というテーマで講演した。大慶に滞在する間、油田の責任者から大慶の生産情況などの説明を受けた。

大慶から哈爾濱で数日を滞在してから、三月二十五日に瀋陽に戻った。

蕭紅に遥かな思いを馳せて、山丁は詩を書いた。

『小城三月』は雪化粧

遙か彼方から『春曲』が聞こえてくる

呼蘭の『生死場』を再訪して

新世代は蕭紅を追憶する

一九八二年三月十二日呼蘭にて

注：『小城三月』、『春曲』、『生死場』はいずれも蕭紅の作品である。

山丁は瀋陽に戻ってから、妻の李素秀の長男が病死したことを聞いて、非常に悲しかった。かれはかの女を慰め、シヨックのなかから立ち直ってもらうために、毎朝、妻をとめない散歩と太極拳をした。かれらは時々、即興詩を一日に三、四首も作り、景色や物を詠っていた。あの時は、一人で一首、ある時は、二人で一言ずつ詠んで、一首の詩を完成した。次の「雨後、花を鑑賞する」は二人の共作である。

エンジュの花は散って泥といっしょになっている
花の寿命は一体、どれほどなのか

人生はさっと消えゆく朝露のように
ただ秋の到来の遅れを願うのみだ

このような通俗詩を一月に五十首以上作った。勿論、これは自己鑑賞にすぎなかった。しかし、これをやることによって、山丁夫人はだいぶ元気になった。

六月、山丁は妻と開源老城東大獅子溝へ両親の墓参りに行って来た。名誉回復後、山丁は毎年、故郷に帰って親の墓参りをした。郷里の人々は皆、山丁を親孝行だと口々に誉めた。一九九三年一月に脳出血を患ってからは、やむをえず、中止している。

六月中旬、丁玲は陳明をともなつて、瀋陽へ講演にきた。山丁はかの女の講演を聴き、サインをもらった。

『中国新文学大系』（一九三九—一九四九）編纂委員会は山丁に一、二篇の短編小説を選んでほしいと要請の手紙をよこした。こうして、かれの『残欠者』（一九三九年出版、短編小説選『豊年』収録）は『中国新文学大系』第三卷（一九三九—一九四九）に収録された。

七月中旬、山丁は「蕭軍文学活動五十周年」記念キャンペーンに参加するため、北京に行った。参加者には黒竜江大学の陳隄、本溪の方未艾、上海の陳涓などの姿があった。

夏休みに入ってから、山丁夫人も北京で合流した。友人たちは久々の再会を喜びあった。

八月十日、山丁夫婦は瀋陽に戻った。

九月二十日、四川人民出版社が『中国文学家辞典』第一、二巻を送ってくれた。第二巻に梁山丁の紹介があつ

た。このほかに、山丁は東北作家の馬尋（金音）、鉄漢（郁其文）、羅麦（左蒂）、李正中（柯炬）、朱媿など十数人を紹介した。これらの人達は第三、四巻に収録された。

九月二十三日、遼寧人民放送局の李力（現遼寧放送局庁副庁長）は山丁の家を訪ねて、「文化生活」コラムに原稿を依頼した。山丁は『東北作家史話』をリスナーに紹介することになった。『東北作家史話』は東北出身の作家の作品を紹介した。原稿は一回二千字であり、一回の放送時間は二十分である。毎月一回の放送は山丁自らが行っていた。

放送は一九八三年一月から始まった。山丁は十二人の作家について、しっかりと準備した。

十一月、于鉄、聞功、趙樂璞は共産党組織に指名され、山丁の作品と歴史を研究しはじめた。これは党が古希の老作家に関心を示したことを表している。山丁にとっては喜ばしいことと言えた。

十月十七日、元洮南連合中学の教え子である靳韜光（元省放送庁庁長）、楊春栄（元省放送庁幹部）、張健中（元鞍山市市長・一九八八年死去）、王大軍（省郷鎮企業管理局局長）が山丁に会いに来た。師弟は久しぶりに再会の喜びを語り合い、各自の家庭事情、仕事のことを報告した。

この四人は先生の山丁が名誉回復され、新たな仕事に復帰したことを当時のクラスメートたちに知らせた。それから山丁と連絡をとる連合中学の生徒はますます多くなった。昔の教え子は今は皆立派に一人前に成長していた。

この年、すなわち一九八三年の元旦は山丁は結婚したばかりの夫人と瀋陽の自宅で過ごした。とても幸せなお正月であった。

この年に書いた『人々の心の窓をあけた』金劍嘯詩文集「回想」が『哈爾濱日報』一九八二年四月七日に掲載され、『李克異を慕う』が『鴨緑江』一九八二年第二期に掲載された。

一九八三年 七十歳

元旦の後、山丁は省中長編小説創作経験交流会に参加した。

一月のある日、李力がラジオ放送の『東北作家史話』を録音にきた。山丁は李力とうまく協力し、あつという間に完成した。

一月三十日、『東北作家史話』第一講、「蕭軍とかれの『八月の郷村』」は朝七時半のラジオ「文化生活」のな

かで放送された。山丁は夫人とともにラジオを真剣に聞いた。

放送後の反応は上々だった。老作家謝挺宇は山丁に「私は東北出身ではないが、一九四五以後、ずっと東北で生活しているから、私も東北の作家の一員であるはずだ」と訴えた。そこで、山丁は第十二講に「謝挺宇とかれの『霧夜紫灯』を講じた。

二月、四月、七月、八月、九月、十一月にそれぞれ「馬加とかれの『赤い果実』」、「羅烽とかれの『七つ目の坑』」、「白朗とかれの『幸福な明日のために』」、「舒群とかれの『祖国のない子供のために』」、「蕭紅と彼女の『呼蘭河伝』」、「金劍嘯とかれの『興安嶺の風雪』」など、合計七講を放送した。毎回、放送前にまず録音をした。このために、山丁は一年間かなり緊張したが、良い仕事をさせてもらえ、また楽しくもあった。

多忙な山丁にとって、夫人は良き理解者だった。インタービューを受けたり、約束した原稿を書いたり、会議に出たりして、自分や家庭のことを顧みることができない山丁を、夫人は最大限に支えてくれた。

二月、夫人を連れて、長春の長男梁大成の家を訪ね、長春の家族と友人とともに、結婚後の最初の春節を過

した。

四月、馬加の長編小説『北国風雲録』の出版記念座談会に出席した。白内障を患って、七十過ぎていて馬加の作品を参加者は高く評価した。

山丁は絶え間なく、資料を集め、『東北作家群像』、『文壇交遊録』の準備に取りかかった。そして、長編小説の『灰色の街』と『赤い草原』の構想も始めた。まさに「残された少ない時間を有効に使うため、自ら自覚して奮闘する」ようだった。これはまた山丁の座右の銘である。

五月十五日、山丁は吉林大学が主宰した「蕭軍創作學術研究会」に参加するため、長春へ出向いた。会議は二十日に終了した。

会議閉幕後、白城子地区の洮南へ行った。そこで連合中学の生徒たちと再会した。かれらの多くは政府の幹部になっていた。その生徒たちは先生を囲む座談会を開き、白城子地区の運動会や音楽会などを鑑賞した。山丁は生徒たちに格別歓待され、予定を繰り下げ、六月四日によりやく潘陽に戻ってきた。

しばらくしてから、山丁に掛け軸が届いた。

三十八年間のことはまるで煙のように漂い

歌を一曲詠って涙は杯の前にこぼれ落ちる

革命の志は、水の波と共に

いつまた会うのか

杯をあげて少年時代を想う

詩の裏にはこう記されていた。

山丁学長は高齢にもかかわらず、連合中学の生徒たちと再会を果たした。座談会で歌を詠い、皆の涙を誘った。先生の革命精神に感動させられ、この書を書いて、記念にさしあげることにする。一九八三年六月三日

これは洮南県委員会宣伝部張文貴が作った詩である。

かれはわざわざ表装して、山丁に送ってきた。

この時の感動は山丁にとっては忘れられない。かれはこの掛け軸が特別に好きである。二十年来、家の客間でさまざまな掛け軸を換えたりしていたが、これだけは一度も外すことがなかった。山丁はこの詩のために自ら作曲した。

山丁は瀋陽に帰ってから、老作家に定年退職を勧める報告会に参加した。山丁は直ちに、定年退職の手続きをし、まもなく許可された。山丁が定年してから、行政上十四級、要するに副局長クラスの待遇を受ける。

八月三十一日、「蕭軍文学活動五十周年祝賀会」参加のために、哈爾濱に出かけた。会議の後に、参加者は呼蘭にある蕭紅の生家と記念館を見学してきた。九月四日に会議が終了、山丁は瀋陽に戻った。

九月の末、遼寧省は吉林省、黒竜省に続いて、蕭軍の故郷―錦県で「蕭軍文学活動五十周年祝賀会」が開かれた。山丁は会議参加のほかに、また蕭軍の家族を連れ、蕭軍の生まれ故郷の大碾盤村を案内した。

山丁は蕭軍文学活動五十周年学術会議を機会に東北三省に対して、『東北淪陥時期作品系列叢書』の出版を関係者に働きかけた。実は山丁は名誉回復後に、文学作品の整理に着手した。瀋陽在住の金湯、馬尋、楊肖、崔東（高柏蒼）、木風、李喬、楊絮、李正中などの友人や老作家は積極的にアイデアを出し、編集委員会を設立した。

後に、遼寧省委員会宣伝部と春風出版社が共同して、山丁を総編集に、郵文を編集として、本の出版に向けて本格的に動き始めた。

山丁は古希の老人だと思わないほど精力的に取り組んだ。これらの本の出版は意義重大である。苦しい時代を通り抜けてきた生存者にとって、自分の作品を再び日の

目を見ることになる。政治の立場から言えば、名誉回復である。この世に既にいなかった者にとっては、魂への慰めである。

夫人は山丁を大いに助けた。コピーのはっきりしていない原稿を写したり、外部との連絡をとったりしていた。

十月、遼寧省作家協会は遼寧省文学座談会を開いた。参加した作家たちは遼寧省における創作、評論、出版物について討論した。

十月末から十一月の初めに、山丁は吉林省社会科学院が長春で召集した小さな座談会の招きを受けた。中国社会科学院の徐迺翔も参加した。会議は『東北淪陷期文芸運動資料集』、『中国現代文学史資料集叢書』を甲、乙、丙に分けて、出版することを論議した。

山丁は長春から戻ってきた間もないうちに、山東大学の「郭沫若學術検討会」参加の招待を受けた。

十一月十四日、山丁は済南に着いた。十六日、「山東省郭沫若研究会成立と學術交流大会」が開幕した。詩人の高蘭教授が開幕の挨拶をした。大会は四日間おこなわれた。

会議閉幕後、山丁は夫人とともに、済南市、大明湖、趵突泉などを観光した。この後、泰山、曲阜、孔府、孔

廟、孔林などを回ってから、済南に戻った。済南で山丁夫婦は詩人の高蘭を訪ねた。山丁はかつてから高蘭の名を慕っていたが、もっと早く会うことができればと悔やんでいた。

済南を後にしてから、山丁夫婦は青島に来た。かれらは市内観光してから、一九三四年蕭軍と蕭紅が東北から青島に逃れてきた時に住まいにしていた観衆路一号の住宅を訪ねた。海に面した極めて環境の良い場所にある二階建ての家である。しかし、残念ながら、家主が何代も入れ替わったため、元の面影はほとんど残っていないかった。

十一月二十七日、山丁夫妻は長虹号で上海に向かった。二人は上海で真つ先に図書館に行き、資料を調べた。上海で旧知の姜丕芸、陳涓にあった。二人は大上海を見る暇はほとんどなかったが、四日間の滞在中に、二人は杭州の岳飛廟、岳飛墳、西湖、六合塔を一日走り観光した。十二月四日、南京に到着。南京で中山陵に参拝してから、玄武湖を遊覧した。このほかに、呉英、呉郎の子供季勳夫婦を訪ねたり、資料を調べたりした。南京に四日間滞在してから、山丁夫婦は北上した。

十二月九日、北京に到着。北京にいる間、やはり友人

を訪ね、資料を調べた。もつとも記念すべきなのは北京で山丁が七十歳の誕生日を迎えたことである。

十二月二十一日、山丁夫婦は瀋陽に帰ってきた。一月に亘る長い旅で二人は沿海都市の名勝、古跡、風景を満喫した。これは二人にとっては素晴らしい記念となった。

山丁が連載放送している『東北作家史話』の一部の内容を『作家生活報』に発表した。

山丁の『文壇を駆けめぐる五十年―蕭軍を記す』は『錦花』一九八三年六月号に掲載された。

一九八四年 七十一歳

この一年に『東北作家史話』を計五講を放送した。

『高蘭とかれの「私の家は黒龍江にある」』、『金人とかれの「静かな頓河」』、『端木蕻良とかれの「科爾沁旗草原」』、『李克異とかれの「城春草木深」』、『謝挺宇とかれの「霧夜紫灯」』であり、十二人の作家に触れた。

第二弾の『東北作家群像』は都合で放送を実現できなかった。

三月、山丁は定年作家、国家幹部として、副局長の待遇を受けて、三LDKの家を与えられた。場所は北陵小区十一号楼、また遼寧省作家協会創作の家とも言う。こ

こに著名な馬加、方氷、謝挺宇、于鉄、聞功、思基なども住んでいる。

ここは環境が静かで、便利である。北陵公園にも近い。親戚や友人たちは皆喜んでくれた。旧友の方未艾、方紆、金湯、秋螢などからお祝いの詩をもらった。

三月、山丁は遼寧省作家協会が主催した建国三十五周年文学創作会に二日間参加した。参加者は近年の創作情況と今後の創作方向について、活発な意見を交わした。この時期、山丁は資料収集や、原稿の執筆に忙しかつた。

中国現代文学の空白を埋めるために、遼寧春風文芸出版社は遼寧省委員会宣伝部の支持をえて、『東北淪陷時期系列叢書』を出版することにした。山丁を編集長に、部文を責任編集者に任命した。

山丁はまず女流作家の小説集を編集し、『長夜螢火』を出した。

五月、メーデーの休みを利用して、山丁夫妻は開源老城東大獅子溝へ父母の墓参りをしてきた。

五月中旬、蕭軍、王徳芬夫妻は遼寧省撫順で開かれた「全国炭鉱文学作品表彰大会」に参加する。遼寧省作家協会は蕭軍夫妻を瀋陽で招待するために、山丁を撫順へ

蕭軍夫妻を迎えに行かせた。夫妻と同行する炭鉱部副部長の張超、書道家の王遐拳は創作の家に落ち着いた。

到着した晩に、蕭軍夫妻は五階にある山丁の新居を訪ねてきた。久しぶりの再会を楽しんだ。

翌日、蕭軍一行が北京に帰った。駅まで省作家協会主席馬加、副主席謝挺宇、山丁など、十数人が見送りに行った。

八月、元洮南連合中学の生徒、現洮南県委員の老幹部処処長の何老源の案内で、山丁夫婦は湯崗子温泉、千山を見物した。元連合中学の生徒、現市長の張建中が一席を設けてくれた。瀋陽に帰った山丁は詩を書いた。

三十九年前のことを回顧すれば

水は波を巻き起こす

青春をかけて、北の要塞を征す

今日では門下生が天下に満ちている

八月下旬、山丁の旧友、女流作家の田琳（但娣）が哈爾濱から瀋陽にやって来た。方紆、楊紊、郭鋒、陳南、李喬、李正中、朱媿、木風、金湯などは山丁の家で歓談したり、東陵で記念撮影をしたりした。かれらはまるで青年時代に戻ったように喜んでた。

九月、黒竜江大学教授、哈爾濱文学学院院長の陳隄は山

丁に会いに来た。瀋陽在住の友人たちは西関村の回民飯店で陳隄を歓迎した。

後、山丁夫婦は陳隄と伴に、本溪南甸の老友方未艾を訪ねた。本溪で四人は八百メートルの鉄刹山に登った。

山丁は詩「鉄刹山志」を書いた。

早朝九頂鉄刹山に向かう

車は八盤嶺を走る

乗客は山の美しさを感じ嘆する

谷は青い海のように、木の葉は火のようだ

十月、老友で定年退職した元電気技改局党組織書記路鉄成夫婦の招きで、山丁夫妻は清河ダム、発電所、清河鎮を遊覧した。

十一月二十六日、詩人成弦死去一周年に際して、かれ

の生前の老友たちは瀋陽西関村飯店で成弦の一周忌を挙行した。

十二月のある日、山丁は省図書館で水旅の『灰色の運命』、勵行健の『郷里の事』を偶然に見つけた。この以外な発見は山丁が編集している「東北淪陥時期系列叢書」を充実させた。

この一年間、山丁は『東北作家史話』の放送のほかに、主任として哈爾濱文学学院のために、二十万字の『東北文

学研究叢刊』第二輯（一九八四年八月）を編集した。

『吉林大学学报』（一九八四年）に『文壇の猛者——蕭軍』（東北作家群像・その一）を発表した。遼寧省人民出版社（一九八四年）が出版した『中国現代文学史』（上）の四〇四頁―四一三頁で山丁について紹介した。

一九八五年 七十二歳

一月十五日、山丁は瀋陽市遼瀋一校と東区少年宮の招きで、「冬休み小記者養成班」で授業をした。山丁は子供記者たちが自ら取材し、原稿を書くのを見て、新しい世代の成長を嬉しく思った。

三月、山丁は遼寧大廈で行われた遼寧省作家協会第四次會員代表大会に三日間参加した。省委員会書記の戴蘇理、孫維本、朱川、劉逸雲、副省長の張志遠などが参加した。会議は新しい組織を選出し、今後の方針を固めた。六月十四日。この日は山丁の名誉回復六周年だった。

かれは朝、早くから夫人と新生化工工場へ行った。かれはそこで十二年間も汗を流した。山丁夫妻は工場で熱烈に歓迎された。ある人はかれのノートに「鄧さんのご到来歓迎」と書いた。（鄧立は山丁の別名である）

六月、遼寧大学中国文学部の学生張麗麗は、指導教官

の張毓茂の指導のもとで、『山丁を論じる』と題する卒業論文を書いた。論文は優秀な成績で合格した。かの女は山丁を研究する最年少者である。後、張麗麗の論文は『東北文学研究資料』に掲載された。

七月中旬、山丁は夫人に伴われて、承德で開かれた「納蘭性徳死去三百周年」學術討論会に参加した。今回は全国会議であり、目的は民族研究を推し進めるところにあった。

会議の期間中に、山丁夫妻は旧友の東北師範大学の蔣錫金教授、西北師範大学教授の匡扶夫妻と再会した。このほかに、名アナウンサーの王鉄成、雑誌『東西南北中』の編集長などの新しい友人を知り合った。

会議中に参加者は観光もした。山丁夫妻は承德のさまざまなお寺や、ブダラ宮などの遺跡を回った。会議終了後、山丁夫妻は北京に向かった。

北京で夫妻は袁犀夫人姚錦邸で袁犀の遺作『歴史の回声』の訳者田中稔と会った。スウェーデン在住の女流作家趙淑侠女史の叔父趙憲武をも訪ね、趙女史の近況を聞いた。北京の家族ともたびたび団欒した。

山丁夫妻は本屋へよく行った。しかし、かれらにとっても重要なのはやはり北京図書館で資料を調べ

ることであつた。二人は図書館で山丁が一九四四年に發表した中編小説『精神病院にて』を見つけた。コピー不可のため、山丁夫妻は朝から晩まで、一週間をかけて、ようやく七万字の小説を写し終えた。この小説は当初『蘆葦』というタイトルだったが、山丁はそのまま中編小説選集『天のはてに伸ばした大地』に編入した。

八月に、山丁夫妻は瀋陽に帰った。

十月、山丁は哈爾濱に向く。十月二十一日、北上する列車のなかで山丁は詩を書いた。

松花江、貴女は文学の故郷

貴女は祖国の北方を流れ

暖かい心をもっている

* * *

我々は岸に静かに立って

貴女の楽しい歌声を聞く

中華民族の繁栄と共産党を

歌う

* * *

松花江、我が母よ！

貴女の乳を飲んで育った

貴女の側―私の戦った所に戻りたい

* * *

松花江、我が愛する人よ！

貴女の首の傷を見て

敵に対する怒りを激発し

こいつらを葬らなければならぬ

陶頼昭駅に到着 三時五分

松花江、貴女の微笑みよ！

まるで過去は死亡と災難

未来は光明と希望を言っているようだ

* * *

寒さを吹き飛ばした松花江

あらゆる苦しみを胸に秘め

それを力に化し

希望を詩に書き上げた

* * *

文学の故郷、松花江！

ロシアの銃に狙われ

中国の土地、村

ここは昔の戦場だった

列車は陶頼昭駅を通り過ぎた

私の少年時代に

太ったロシア商人は

x x で毛皮と取り替え

x x はただの紙屑になる

列車は老少溝駅に到着

あの柳の木の芽に

復讐の炎を秘め

人民は銃を持ち

侵略者を追い出す

詩は終わっていないようである。しかし、詩のなかから山丁の共産党、祖国、人民に対する真心を見ることが出来る。山丁は作家であり、詩人である。かれの詩は日

本の侵略者を恐れさせ、ヒーローを謳った。

十月十九日、山丁は遼寧大廈で行われた学習会に参加した。専業作家、地元文学連合会と雑誌の責任者も参加した。会議は三日間続き、中央の指示の伝達や経験交流などをして、成果は上々であった。

この一年に、山丁は『東北現代文学研究叢刊』第二輯に『前駆者―金劍嘯同志を回想する』を、『遼寧法制報』に蕭紅の『二匹の蛙』の書評を、『作家生活報』に『詩人成弦の一周忌に記す』を書いた。このほかに、『東北現代文学研究叢刊』第二輯を編集した。

(大谷大学専任講師)